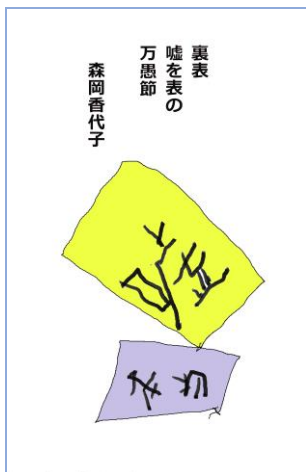




裏表嘘を表の万愚節

森岡香代子

なるほどね。物事にある「表裏」「善悪」「建て前と本音」「光と影」は、それぞれが表裏一体。四月一日は裏が表にひっくり返り嘘がまかり通る日。



目の奥に春の憂鬱のある埴輪

谷本 宴

埴輪の目は眼球がない。だけど空洞の目がある。その空洞に何を感じるかは、見る人次第。埴輪の目は、埴輪の気持ちとも作者の気持ちとも。



たんぽぽや黄色に生まれてよかったね

井口夏子

擬人化の句だが、作者はたんぽぽと友達になって語りかけている。こういう擬人化もあるんだね。読者の心をふんわり、ほんわかとさせるのがいい。



まつすぐに生きて切なし猫の恋

黒田久美子

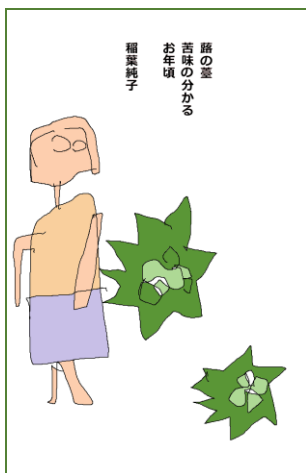
普段は上品なのに恋の季節には狂ったように本能を剥き出し一途である。「切なし」ということは恋は成就していない。よいご縁がありますように。



さくらさくら散りながら居場所探します

大林和代

桜の花びらは、散りながらどこに着地しようかと迷うものなんだね。風のいたずらで、納得のゆかぬままに着地させられる気の毒な花びらもある。



蔦の臺苦味の分かるお年頃

稲葉純子

甘い、辛いだけでなく、苦味に旨味を感じるのは何歳からだろうか。苦味が美味しくなるのは、味を感じる細胞が減るから。つまり老化らしいよ。